

せ、三主色にそれらの色、さらに Black, Grey, Brown を 1%~20% 混色し、その過程にあらわれる「濃い」の位置を確かめた。色の判定は測色計により CIE 表色系で、反射率、主波長、刺激純度を求め、第 1 報の結果とあわせ検討した。

3. Black を加えることは反射率の著しい低下とともに色を汚染し、また Yellow の主波長の変化をきたした。Grey も Black に準じるが、Blue に混えた時は好結果を示した。三主色に他の種類の色を無作為に選んで加えた場合、主波長が変化し不適當であるが、補色関係にある色を混色すると、もとの色相を保ったまま刺激純度を下げ、「濃い色」を現すことが可能であった。しかし、余色の調整には煩瑣な技術を要し、実用のためには Brown を加えることによっても効果的にその目的を達することが出来る。「濃い色」と Brown との関連は次報で追求したい。

C—44 「濃い色」の考察(第 2 報) —合成染料による濃さの再現—

新潟県立新潟女短大 山崎 光子

1. 天然染料の色の濃さについてはすでに上村六郎氏によって「色相が複雑なためにできるある程度灰色味を含んだ色」と論じられている。その具体的な究明として、第 1 報で「濃い色」の色彩科学的要因を明らかにしたが、本報では、合成染料を用いて「濃い色」を容易に染め出すことを目的として次の実験を行った。

2. 染料は直接染料の比較的、明、彩度の高い Red, Yellow, Blue を選び、その組合せで各種色相を生じさ